



小池辰雄記念図書室だより



水鏡
園城

第14号 2013年8月1日

〒264-0025 千葉県千葉市若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 4階
小池辰雄記念図書室 TEL・FAX 043-235-3815

全国の「読む会」からのあたより

「無者」になること 古和田翔子(兵庫)

クリスチャンの歩みとはどんなものか、愛とはなんなのかな…これらが読書会での私の学びのテーマである。自分自身を無にし、神様 100%になるとどのような生活になるのか、神様が何を求めているのかを未熟な人生経験と結びつけながら学ばせていただいている。

大学3年生の夏休み、余市に行かせていただいた私は、1年半放置していた湿疹を抱えていた。いくら北海道とはいえ、真夏の労働はつらいだろうと想像し、人の中で1日過ごすことがしんどく、帰宅後ぐったりとなっていた当時の私には、無理なことだと思っていた。しかし、心に決めていた。「自分を守ろうとせず、何事も神様に委ねよう」と。

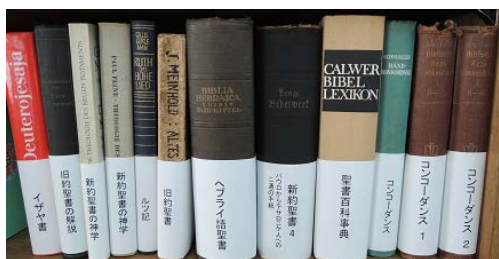
無心に毎日神様だけを考えて労働させていた。あるがままを受け入れ、のびのびと過ごした。時間に縛られた生活がまたストレスになるのではないかと考えていたが、そんなことはなく、自然の中で働かせてもらい、やっつけていける自分がいた。驚きだった。その時以来、私の身体に住みついていた湿疹はなくなっていった。「無者キリスト」。自分を無にすることで、どんなに神様の栄光を表すことができるか。机上の学びが、余市でまさに実生活と結び付いたような気がした。

まだまだ学び足りず、知らなければならないことがたくさんある。これからの人生において、読書会での学びはとても重要なものになると確信している。

■最近の図書室

～外国語書籍の背表紙作成①

ドイツ語をはじめとする外国語の本の題名や内容を日本語に訳し、背表紙としてつけ始めました。



小池辰雄を読む会

●余市

2013年8月25日(日)13:30~15:00
2013年9月1日(日)13:30~15:00
2013年10月27日(日)13:30~15:00
余市郡余市町豊丘町 370-9 恵泉祈りの家
*会費:無料(自由献金)
*連絡先:0135-23-9222(木下)

●小樽

2013年9月27日(金)14:00~16:00
小樽市緑 2-7-11 小樽友の会
*会費:無料(自由献金)
*事前の連絡先:0134-67-9123(山上)
*当日の連絡先:0134-23-0923(山上)
*8月はお休みします。

●帯広

●北見

*しばらくお休みします。

●都賀

2013年8月17日(土)10:00~12:00
2013年9月14日(土)10:00~12:00
2013年10月12日(土)10:00~12:00
千葉市若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 5階
*会費:1000円
*連絡先:043-235-3815(佐藤)
*準備のため、出席のご連絡をお願いします。

●神戸

2013年8月11日(日)14:00~15:30
2013年10月13日(日)14:00~15:30
神戸市中央区磯上通り 4-1-12 神戸パイブルハウス
*会費:500円(自由献金あり)
*連絡先:090-9256-4841(田中)
*隔月開催のため、9月はあいません。

*予習不要・初心者歓迎

図書室便りは偶数月発行です。

本図書室は献金で運営されています。

内村鑑三を師と仰いで

小池辰雄を語るのに、欠かすことのできない第一の人物は内村鑑三である。

辰雄の代表的な著書『無者キリスト』の総扉にも、内村の名前は掲げられている。

「この『無者キリスト』を 私のたましいの旅路で時機に応じ 道しるべとなり 今は北十字星の如く 天界に輝いている 内村鑑三先生 藤井武先生 塚本虎二先生 手島郁郎兄 小池政美の五つの霊星に捧げる。一九七五年晩夏 小池辰雄」

と。しかし、本・小池辰雄伝において一度も、内村鑑三との関係を取り上げていなかった。

小池辰雄記念図書室の書棚には、内村鑑三全集、『一日一生』などの著書、あるいは研究者による評伝もあり、無教会の流れをくむ雑誌群がセピア色に変色しながらも整理され揃っているのだ。

たとえば内村が1900(明治33)年に創刊した月刊雑誌『聖書之研究』、藤井武1920年創刊の月刊誌『舊約と新約』、黒崎幸吉1946年創刊の『永遠の生命』など…。無教会派に連なる面々の「いのちがけ」とも言える盛んなる活動の一端を眺望することができる。

私は図書室開設以来、約2年、ここに足を運び、小池辰雄のルーツをたどるために、これらの黴臭い雑誌を手にとって、丸一日、大正～昭和初期にタイムスリップして時を過ごしているが、これがまた古い白黒映画を見る以上に生々しい経験である。

それはさておき、無教会主義キリスト教の創始者・内村鑑三の存在を知った辰雄は弱冠18歳であった。1922(大正11)年の晩秋のこと。水戸高校1年の辰雄は急性腸カタルで水戸の病院に入院し、ついに第一学年後半を休学してしまう。いったんは東京・武蔵野に帰り、失明の母と二人で、叔父の家に寄寓していた。そんな己に失望していたある日、亡兄政美が遺してくれた書架から「とりて読め」との心持ちで、内村鑑三の著書を数冊見つけるのである。

それは『宗教と現世』、『聖書之研究』誌の創刊号から何冊かであった。これが辰雄の心を捉える。青鉛筆を握り、感動する箇所には傍線を施しつつ、ついに手元にあった内村の著書を全部読了する。そこで初めて聖書の言葉の素晴らしさ、自由、生命、力を知った。聖書というものに言い知れぬ親しみをおぼえるようになった。

すると、本物の内村鑑三に会ってみたい。当時内村は、毎週日曜日午前10時から大手町の私立日本衛生会講堂で聖書の講義をしていた。『神の幕屋人物詩伝・霊界の星々』の中で、辰雄は、この時のことを、「白線高校時代にわが魂を開いて、福音の世界に入れた内村鑑三」と詠っているが、その日は1923(大正12)年2月25日であった。

辰雄は500～600人の聴衆の中で、内村鑑三の迫力ある講義を聞いた。檀上には「幸いなるかな 心の貧しき者 天国はその人のものなり」と、「山上の垂訓」の第一言が大きな垂れ幕として掲げている。内村の声の響きの中で聖書の真理を聞く喜びに辰雄は浸っていた。これが辰雄の信仰史の「第一期・大手町時代」の第一歩であった。

今日もこの記念図書室で、「世に基督信者ほど弱いものは無いのであります。…然し彼れ基督信者が斯くも無能力になりし所以は、全能なる神が彼に宿らんとためであります。即ち彼れの弱きに由りて神の強きが顕はれんためであります。彼れの愚かなるに由りて神の智きが顕はれんためであります。故にパウロは申しました、『我は弱き時に強し』と。」なる内村の説教を見つけ、正真正銘、小池辰雄の師匠なんだなあ、と一人私は感慨にふけた(明治34年4月22日発行の『聖書之研究』第八号)。



内村鑑三
(1861～1930年)
江戸生まれ。
札幌農学校卒。
米・アマスト大学に
留学。
足尾銅山鉉毒事件にかかり、日露
開戦時に非戦論を
唱えた。